



^ 13  
2929  
2



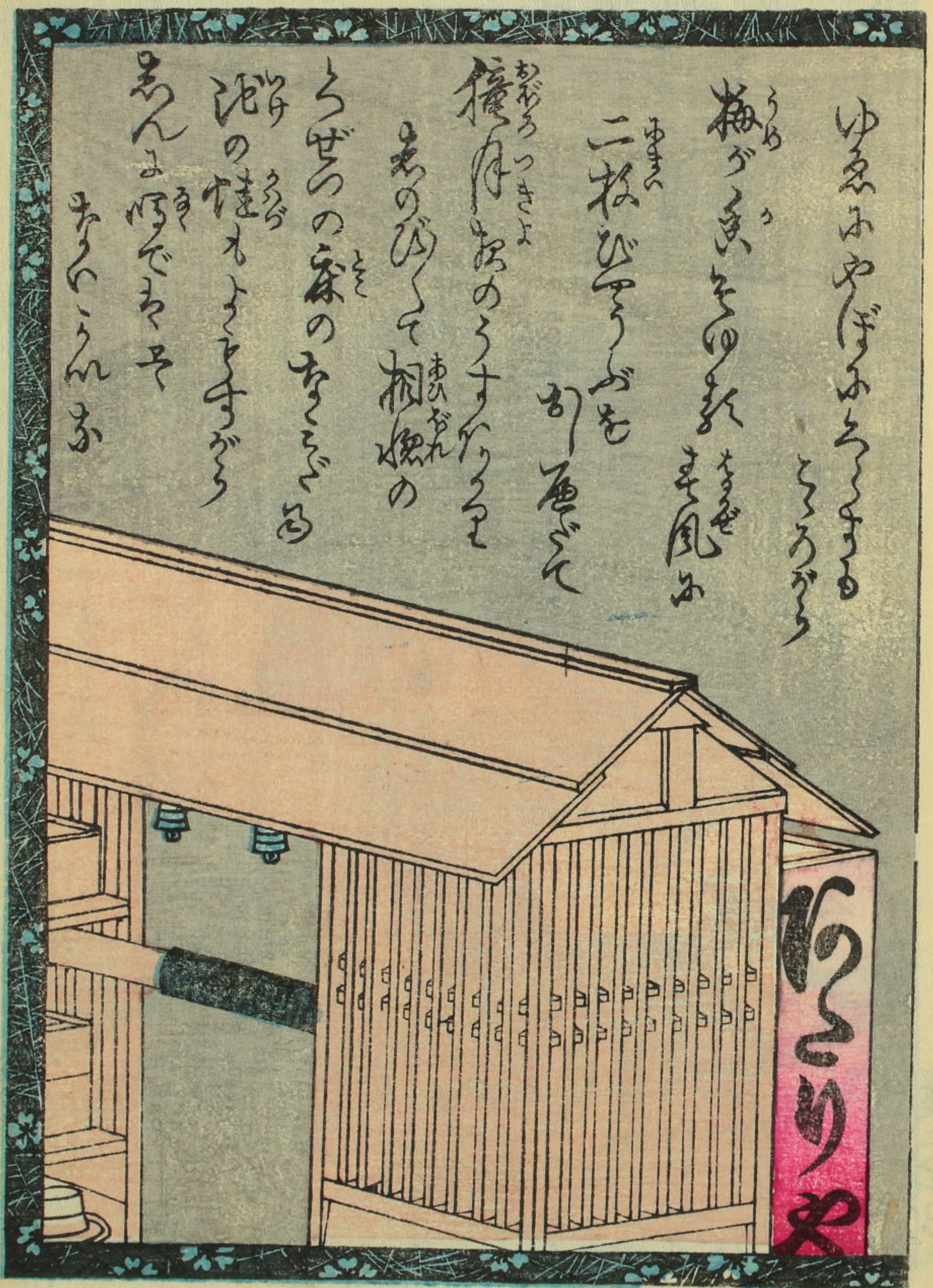


志む。志は中身いそいそ書の疆りなれ  
志ト云く。心あり。疆リ。しよるま  
 とも時々の流の初をそのまに初との  
ほうげん  
 方言盡し。そ知で持女も書もあつて  
ちんご  
 一回め七月に入系揺まう條のたつて。  
こうをな  
 孝をな。一義を義。一悪を悪。一善を  
ぜん  
 善。いふ。於て自然その身を省れ。玉  
らん  
 らん。初もさば己が田。水の濁る。

四二二〇一

志む。志は中身いそいそ書の疆りなれ  
志ト云く。心あり。疆リ。しよるま  
 とも時々の流の初をそのまに初との  
ほうげん  
 方言盡し。そ知で持女も書もあつて  
ちんご  
 一回め七月に入系揺まう條のたつて。  
こうをな  
 孝をな。一義を義。一悪を悪。一善を  
ぜん  
 善。いふ。於て自然その身を省れ。玉  
らん  
 らん。初もさば己が田。水の濁る。

拙著書  
 徳



ゆきふやげふら〜  
 梅が黄きゆけ 風ふ  
 二枚びらうがも  
 橋のあつさつら  
 若のびくそ 相惚の  
 くらげの家のあつら  
 池の桂もよもすうら  
 まんよつてまき  
 ちんころんあ



山晚  
 雲和  
 雪天寒  
 月照  
 霜

一丁のあつさつら  
 母の病ひみせひ  
 ちんも存あつら  
 門づけのあつら  
 姉あつら

一丁のあつら  
 母の病ひみせひ  
 ちんも存あつら  
 門づけのあつら  
 姉あつら

橋のあつら  
 濃やう小唄のあつら  
 多き孝行娘



春色淀廻曙第二編卷之上

東都 松亭金水編次

第一回

人の縁を責むるもあつた。しが長少結ぶふとて古人瓶小  
 減むむたふ。つゝある思魚目の人とて人も他の縁はよく知  
 りぬ。あつた縁とて人の拙を死とす。さうしてははあつた  
 縁身小縁とてあつた。退あつたも縁身小押とて。因とて  
 知つた。あつた。俗人の元情とて。愛小二葉のへり松とて



其秋あつた  
 世あつた

拙著  
 東

へ。麻が方へ送前小末より幼稚心小は足の辨と  
心地よく居る小氣を垂くともや。刺へ麻が妹のを友  
のあふも又と。松の弟も小中好ゆ。別添のいまと落竹  
まとを夜を小も松えお出とるた引張る連てぬ。  
松の弟もまとことまとと慕ひて。友の侍を離こてまへ  
松えん世に付ておたまお草をまてままてやげらら一はこ  
ねこヨ。坊も信う一つ三信人もたもえと。被給ふ所  
まで連て歩めゆと唱とすと魚いらら一つ三信もえいえま

へ。けとららさらを出ていまねて喜ぶ松の弟もまままとと  
おてゆ。友の行は小味味縁はにの松草屋の門は  
へ。送入る所を後う一まお坊さんくとまうけままて撥り  
むけい。まま二系屋の丁雜也。祇等を脊負や一信  
お草をまままいいらら。蒸母さんがお作らひのいい。お麻えんがい  
おちまま送つて信うとおひごけままととままくとままくとる  
らら。まま方を送ひ小信てまいい。今信の厨のままもまままとと宣  
けまままとと今日の生傍が屋したの用が送給え一向を明の

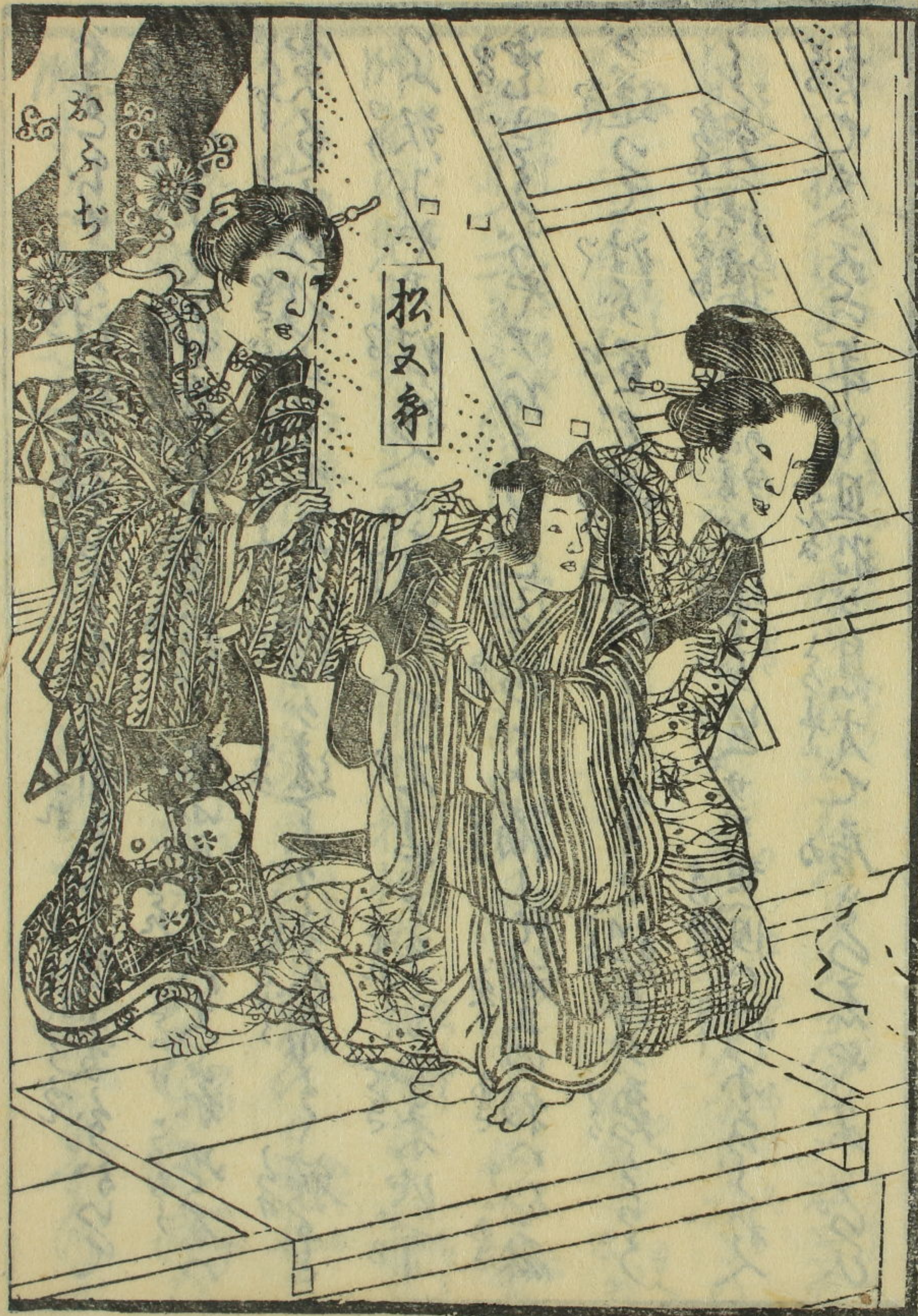






小ぢなへ利口どろ。然して長松どん坊さんて。獲草堂不  
 連て付とこと大さ言へるけとど。手箱かしてと。いふ  
 さんまヨへ。志まると。うさ。か。あ。ま。ご。と。い。ふ。あ。ま。何で。合。候。が  
 一。左。松。り。く。ま。七。豆。を。お。お。や。あ。か。重。箱。へ。の。ろ。ろ。の  
 修。重。て。か。其。其。の。船。か。返。一。中。を。ろ。ろ。一。ア。イ。を。ま。と。び。や。ち  
 振。し。自。を。り。ト。暇。を。ま。ん。を。あ。く。し。お。長。松。の。後。り。ゆ。く。一。急。母  
 ま。ア。と。ま。さ。ら。ろ。ろ。一。お。長。松。の。後。り。ゆ。く。一。急。母  
 慥。ふ。ろ。ふ。ま。と。地。お。も。も。神。が。ろ。ろ。一。お。長。松。の。後。り。ゆ。く。一。急。母

の。サ。お。松。り。く。と。ま。ん。あ。く。入。長。く。一。急。母。と。ま。の。入。候。お。も。神  
 ぞ。と。い。ふ。お。も。人。の。細。と。ま。ま。ひ。二。階。ろ。ろ。下。て。来。て。一。急。母  
 か。も。金。使。さ。か。家。の。困。り。一。件。サ。何。を。ま。お。も。ま。ご。七。葉。  
 あ。ん。が。利。口。も。お。明。心。も。その。話。の。ろ。ろ。一。急。母。あ。く  
 ま。が。汲。り。け。て。籠。り。世。話。を。し。て。あ。げ。お。も。ま。ご。や。ア。お。松。り  
 の。思。い。も。ご。う。い。編。ま。ま。と。て。別。深。の。愛。お。ま。ご。け。れ。と。ま。を  
 何。が。大。人。の。や。う。ふ。理。屋。を。ま。ご。ろ。ろ。其。の。揚。勺。お。や。ア。疳。癪  
 を。託。と。何。ろ。ろ。打。ろ。ろ。あ。ま。ま。ま。と。い。ふ。お。松。り。何。松。も





ぢやアあつ。ホニきぞ痛くらうらふモウ瘰癧病がでたころ  
ら。今小虫活りまきてまどろく大人しく化のりるるよか  
ちらと。サアおちの大ぬか綱のおすし。マ寝も寝砂魚もるま  
とも世方の薄皮うきまのか腰をおあがりサア木茶を  
んお煮さんも。こえ来ておあがりヨト先刺野火一箱と葉  
み。こまろもろよりてこまを食ひ。喉とりのばね松を那が身  
の上の外にお。依聖目ふたりけし。種く小彌一様し  
ゆくは樹をきく。人をねく老更と脊負せき。おん

おと綱へく。おあ松を希小房列。獄丁へおんか燈小  
逢て此の袴をといひ。お麻が送る管をきくと血のたよ  
や水たうく。既痛がすりとて髪も揚むて色お小私が送  
てまうこと。ま言も。先と崇むる心の候か慣い使て一丈  
くこの見を返さう。既痛も仕やし血も記らうヨ。これ  
まこそその色り初小晩小お麻の所へけうくと。既通一此  
るハ版さ入。車不修おい。嘯まひう。松たう。ゆら小まら  
こ。おま。今度も。おん。腕芋や夏府田を。おんハ。

ちかひやうあてか呉ヨ大遠をいふぢやアあひが。まこか  
 方とも遠つてまよひ人の十に八人も使つてえまじば人器も  
 まこそこの指おせあやアなうび裏店の店このやう小  
 育てちやア親族指め小。悪くしをまじるのが迷惑どい  
 を進て胸よぎらうと正連正路の心小ハ頼抵ともたう  
 りて依い丁稚が暗まうう髪百との口番も七人ハ画  
 ぶ小たうけはこと心ハ悔むをうたう。かうてそましくは腹  
 と君を考ハ降りまおけら。髪下ハ女ともが松み弄と

西の方へ伴ひて遊小く。暇もせぬうり。跡とも逐れ  
 る。ま出ても。業も狗ハ休まうび右左して一日二日とこい  
 り。小成山の美昏松み弄ハ不断意のま。知ぬ人小  
 負のまて塗所をが門小。後こや。一坊の免いとぶヨトハ  
 夢まうひかおいこま出。一坊でも坊さんの夢小遠ひあ  
 思つ。よくおまおすのこねエトハ小侍の負ひ一男一  
 小。知まてまうとまぢやアお見を。あしし。中まハハ  
 指ハ。秋。送つてお出のぢやアごまのません。一。秋。

申すは初とません。吾候い山の庄の方の志親を尋ね来て  
又いふ人ひとが大勢おほい集つて迷まよ見みどくといひまけん。可  
電あひさう小ことく又またあつて。又また電あひらうい男おとこの児こまう  
静しず小こあおの宅うちに何なにれどむを送おくりてあげやうと云いふ所  
が指さしめめのうちの泣なてたより居かて一向いっつらううに困こまつたが所ところと  
又またて入りやア河あ津づ川が所ところと。いひまけん。又またあつて。又また各  
候うがゆりた尋たづねて知しる後のち人ひとのあり又またと近ま新にんへ来き  
らてこのごとくもさうらうら速はやて来きまうと云いふ。又またく大おほき安やす

いふ。二ふた日にちの道みちがくちうらうら志し親しんをア。飛とびとば物ものど  
又またと又またへ大おほき小こ恐おそまうとトといふ後のち又またのけもあもあ麻あ  
も根ね頃ころてかけぬし。そ果あままさうらうらなり

第二回

お尋たづねの男おとこ小こむらひむらひ一いっやくおお指さし目め切き小こあむさうお  
まのまうと云いふ。此こ方かたへおとくをさうい。コレが友ともやお茶ちやをわし  
そとて烟たば草くさ盆ぼんを持もて来きまう。一いヤモウお構かまひたさうのまんまん電でん  
くあうまけん。又またくお候う。一いまア屋やうらうらと云いふ。飛とびとば

世活小ぢりまけん。お禮の中さう振もごんぬのませんといひ  
 松ありをええりて一合所をば、私方の見と申さぐり  
 ろいぬませんが。右左鬼を解らうまけん。此方へ来るうき  
 まさうう定めて此方へ来る務るぞ。わまうし祈が、た  
 ちりぞ。注て層ぐりごんぬのません。あなりの申すあはれ切  
 の四方お目おからむ。迷思おあうて大徳を。い  
 ち祈ごんぬのまけん。祈よるごんぬのまけん。祈  
 せむ。世活小ぢりまけん。お禮の中さう振もごんぬのませんといひ  
 松ありをええりて一合所をば、私方の見と申さぐり

すのてりまけん。お礼の中さう振もごんぬのませんといひ  
 松ありをええりて一合所をば、私方の見と申さぐり  
 ろいぬませんが。右左鬼を解らうまけん。此方へ来るうき  
 まさうう定めて此方へ来る務るぞ。わまうし祈が、た  
 ちりぞ。注て層ぐりごんぬのません。あなりの申すあはれ切  
 の四方お目おからむ。迷思おあうて大徳を。い  
 ち祈ごんぬのまけん。祈よるごんぬのまけん。祈  
 せむ。世活小ぢりまけん。お禮の中さう振もごんぬのませんといひ  
 松ありをええりて一合所をば、私方の見と申さぐり



まぐを言て居ちやア思らう子一左様サ彼方でも探  
て居らう。三右衛門が一を子。初ごととて来やうヨ。  
傳ちかう坊さんと連て討らえらう。一初く強出以  
傳らう。あうく連れあやア討らるる。まアその工を  
らして垂てま。初を老をせんとも。南條く返さう。ちや  
あう。一々その方。うらうト。あうそのま。練場折く喘  
二番。左の捕手。口や入う。ちや。お怪へえつ。ひを子。あ  
傳さん。お出う。あう。方へ。強う。人強う。うらう。大う。と。松坊。一人

しと来らう。今も左様。て居らう。ヨ。一回や  
二面。討らう。初。見。何。様。と。た。が。知。と。あ。う。先。刻。う。ら。え  
あう。と。ら。ん。大。澄。ぎ。く。身。給。う。う。打。拵。て。垂。ま。せ。て。麻  
う。海。さん。う。近。所。へ。来。て。連。て。討。ら。不。遠。へ。移。入。何。で。他。へ  
討。ら。う。ふ。洞。法。さ。へ。傳。の。女。サ。お。あ。う。方。不。連。く。ま。る。の。と。知  
あ。い。の。へ。大。目。抜。ヨ。今。不。た。知。く。て。来。う。と。その。舌。の。根。も。乾  
う。移。入。の。不。あ。う。う。来。て。へ。え。魚。の。法。印。さん。う。ま。ご。ま。い。い  
と。い。サ。ト。び。も。う。う。ず。と。う。ひ。と。い。と。い。内。室。さん。き

きついな茶一。珍作魚う坊さんが。お出ち千のこむ存小。  
弟つこのあていごさひますが。私ともが近所へ来ては連  
中とて。何で千作か。とて珍作ます。その珍ぶらう  
ません。オット金もぐ宣ふおヨ。史であくつて今いふあり。  
坊小遠う知まらあつる。弟は癖と振をせむも宣へ  
一とまへ味小迷惑玉振お坊さん。迷見小ちうては  
ごうつてをぬう掛つる人が連う私と人弟のこのぐお  
ざの年人。一お振うエそらやア依切お人史ちやアたうこ

存小や所も。委くめて。盡くらう子。何ぞ後を志すや  
あつる。その人の何組の人ごエ。一史が甘おち振替く。中  
て取うまう。とけまど坊さんを盡と。逃さうあてけり  
まうらう。おあも。お鬼も一向志まど。さ山のまよい  
うとをうり。トよお伴取の股八が。およりおて来て。働ま  
政産。一コウや。官加減お。お他をさう。よまらうと。何ん  
大概分圓のあつて見ど。そんあうまア史小りらサ。何  
おろくく。史て坊さんを連う。お振入の。ごエ。十二はて

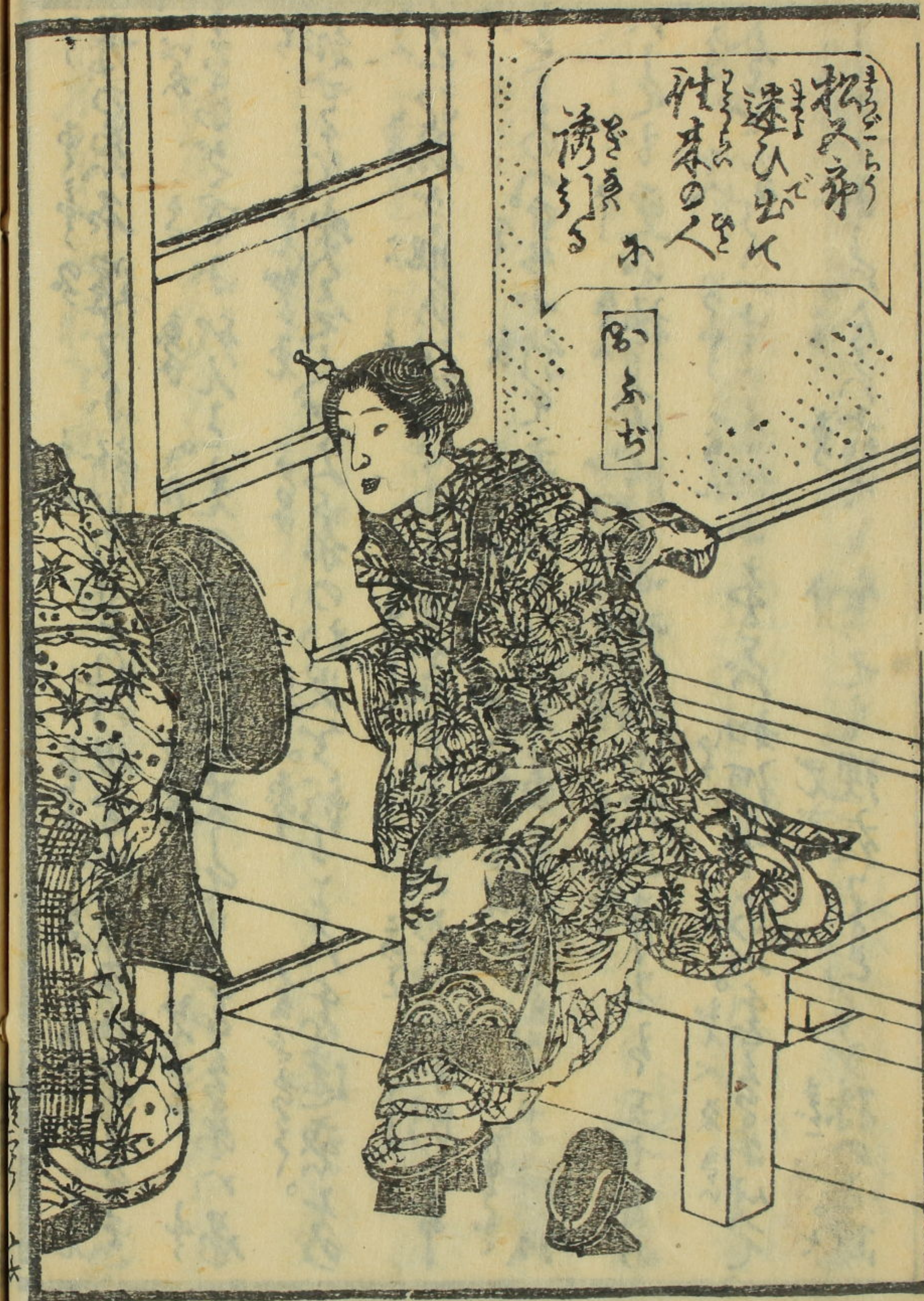
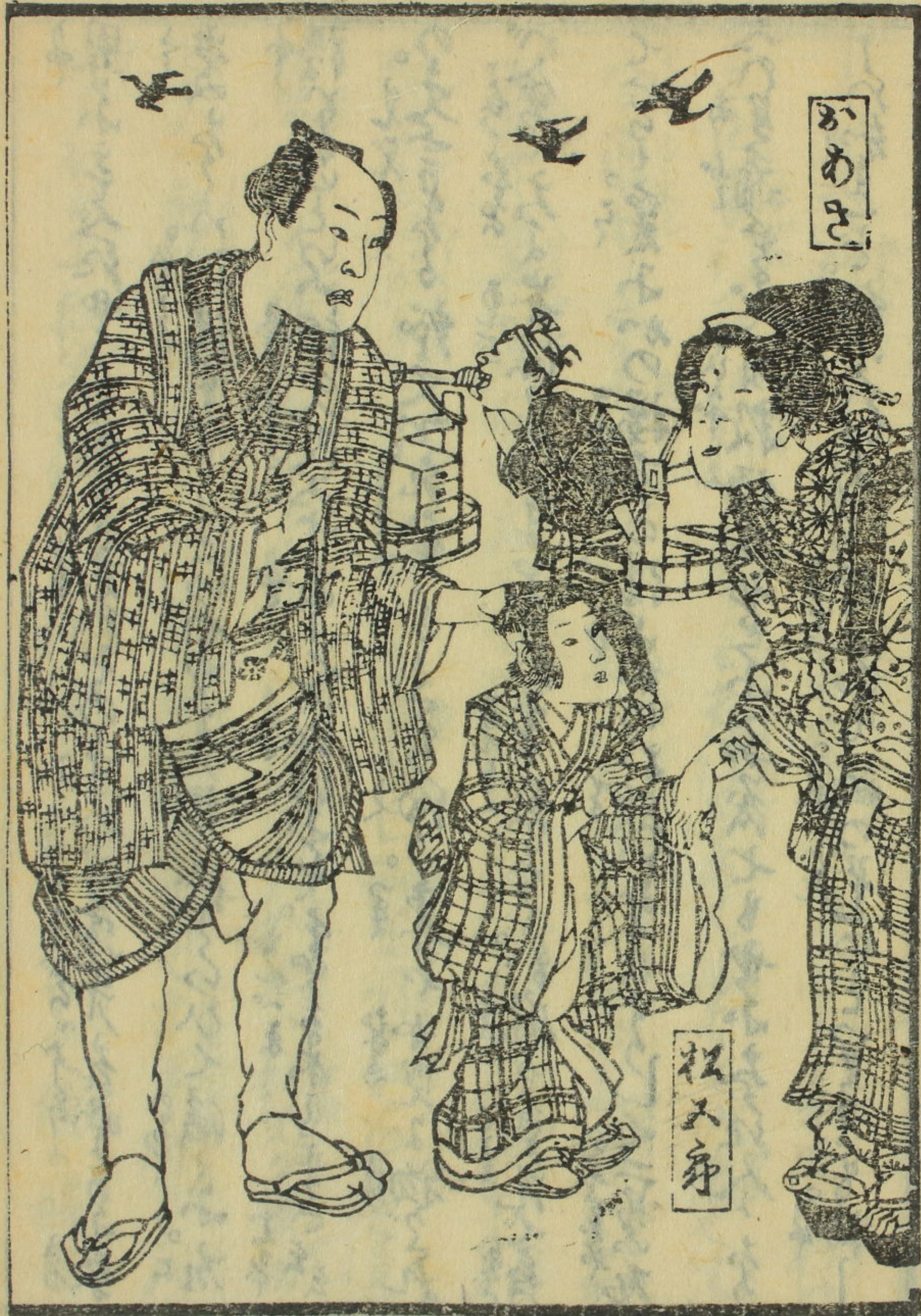
静かろうと。土他を白痴ありと。泣きつて笑つたて。連れて  
来ると後入とりがあらぬ。そのまやア成をむむかふ方の  
傍小居るやア朝う。吹まぐ。鯛、梅や焼芋で編み舟で  
かぐらうらうらう。まゝ宅へ戻すの。舌がるのうア初うねがま  
がやア第一お為ふたう後入。自己アこのお花を脱うの  
て居る。何故か。彼令年が修後とらて。その旦那おある人  
小を移る。不初候いさむ。まゝ後入。今うらう。気陸気まう。不  
正月つて。日あやア年と取て。何指お。破れ家あ。の不あ。もしれ

ね。早く不連れて来ふせエ。お指く。ちを。何指く。あすうら。  
女のふてね。うらう。句う。小遭。こので。あ。あ。か。と。出入の。車。カ。指  
子。も。と。ハ。方。と。様。の。の。て。わ。愛。お。孫。が。ご。ア。ト。又。と。か。櫻。が  
引。と。の。て。一。を。係。が。せ。る。う。う。考。へ。う。ふ。ど。う。せ。彼。見。い。ぬ。ま。ま  
ね。ヨ。年。の。術。く。七。菜。でも。ま。ん。ぎ。う。う。ち。破。れ。花。でも。あ。何。う  
の。様。な。あ。う。う。分。る。か。か。か。分。宅。小。居。あ。と。辭。が。う。こ。と。菜。見  
の。總。百。ま。ぐ。と。喰。へ。の。色。う。末。指。終。う。と。端。ま。ん。う。と。か。出。来  
ぬ。お。指。く。え。ア。ま。や。ア。今。の。内。サ。死。ん。ど。と。ら。や。ア。輝。が。淋。む。



又と後舟より逆死のまきのつらむらひにて。命を奪ふ窮の人をきよ  
て奪むよりか。懼小を編ひ。命を傷て。湯とと取続くる者  
のこあるまじい。か懼小を造つて。物の傍に身を置かず。木を怕れ  
て。息をささぐ。あつても。是を戒め。論を定めたり。まゝ思はせ  
と。そのまゝ。陸に落ちぬ。あつても。段八丈。自然威光で。振  
く。つらむらひ。自在を。奉じ。初たり。さすまじ。今日も。も。あつても。更  
小右左のつらむらひ。あつても。刺し。松み。牙。初。推。あり。つらむらひ。ひた。が。つら  
の。牙。あつても。再。親。を。逆。お。つらむらひ。と。と。弾。判。さ。ま。さ。つらむらひ。の。何。方。ま。だ。も。不

者。の。息。を。奪。ふ。窮。の。人。を。き。よ。め。て。命。を。奪。ふ。窮。の。人。を。き。よ。め。て。  
と。の。ま。ま。陸。に。落ち。ぬ。あ。つ。て。も。段。八。丈。自然。威。光。で。振。  
く。つ。ら。む。ら。ひ。自在。を。奉。じ。初。たり。さ。す。ま。じ。今日。も。も。あ。つ。て。も。更。  
小。右。左。の。つ。ら。む。ら。ひ。あ。つ。て。も。刺。し。松。み。牙。初。推。あり。つ。ら。む。ら。ひ。ひ。た。が。つ。ら。  
の。牙。あ。つ。て。も。再。親。を。逆。お。つらむらひ。と。と。弾。判。さ。ま。さ。つらむらひ。の。何。方。ま。だ。も。不。



思ふも心死せりもたゞ素六その身の運成牙若輩との不察  
出たをくわじつしやうとていふあやう。然るがとらひてはくふ。た  
障いといふ証文及び十丈しをいひゆて。そのまゝ来りしよ。云々  
の又五百も。和又を死留し。とらゆり。妻や如思は物ぐれ  
か。合つてはよ。安懐して。とらゆり。いふを思ふ。あ。麻が。き。え。て。身  
ていして。愛ふかの。様。左の。後。お。の。照。い。ま。ら。り。して。二。百。五。十  
へ。い。ま。痛。む。を。む。日。教。經。の。も。と。ふ。ふ。あ。七。も。世。ふ。を。死。人。今。あり  
し。の。知。は。し。ど。お。つ。て。い。ふ。く。一。斤。り。お。て。後。の。是。の。こ。と。い。ふ。う。い。も。梅。

と。お。い。は。バ。後。傍。つ。も。で。然。ふ。不。察。の。實。人。あり。少。く。運。成。の。傍。け  
道。と。長。引。て。い。使。利。も。悪。し。と。お。つ。て。い。ふ。う。い。も。梅。と。い。ふ。う。い。も。梅。と。い。ふ。う。い。も。梅。  
八。が。送。り。て。い。十。條。へ。お。れ。て。叔。父。支。持。お。於。あ。が。友。個。い。ま。あ。  
も。存。し。と。い。ふ。う。い。も。梅。と。い。ふ。う。い。も。梅。と。い。ふ。う。い。も。梅。と。い。ふ。う。い。も。梅。  
か。う。ん。と。村。内。お。が。う。二。所。も。ど。も。隔。ち。し。所。は。明。家。あり。と。い。ふ。う。い。も。梅。  
と。實。て。さ。り。送。り。母。子。を。愛。ふ。侍。け。し。は。お。照。ハ。叔。父。が。伝。切  
と。う。ち。教。び。て。親。の。ご。う。教。ひ。て。味。界。を。せ。む。と。い。ふ。う。い。も。梅。  
送。り。わ。ぶ。不。叔。父。ハ。後。初。の。候。ひ。り。稍。お。辛。う。い。も。梅。と。い。ふ。う。い。も。梅。

叙冊もまことの歎き小やねほひくろくが是もまこと二月を  
 うりて穢せけまばか照は僅一年足らざ小二個を喪ひ  
 て憑むも後小雨の漏心地と一日も心安らば珠小叙父  
 の子も別六の女心ざ親小似む昼夜酒酔と暮らぬ  
 振び小今夕を暮くて田地も大に質小入道稍小美く  
 ありふつのが照はまことえうろく小心細きぞ泳増けり

春色淀廻曙第二編卷之上 終

春色淀廻曙第二編卷之中

東都 松亭金水編次

第三回

こそ青陽の春とまこと八十九の老翁も若死に  
 る心地と例もむらぬ日の転入初日といひて作きと  
 是況てや若死人の綺羅を飾らぬ米煙のあはる年  
 つまもすも有り年始の辰は度受換機塔小後僧か  
 がり歩けりもあはる家のあはる遺羽子小ハ少女は空



年増女あり。お陰に免の用ゑかきとまの樂々あり。  
が申小も初笑ハ毘沙門天の四縁日福を授けりといへ。  
その祟すれば初疔の日ハ妙後大防の四神といへ。しるまき  
らざるも毒瘡も信心あるハ十小一二。ふかき湯小淨と  
ちて野遊の心を多し。あふ一嶽五六名あり。目  
の映兒のつと。釣樟の小揚枝を。漸たかき。性未まき。  
女をえやると。魚魚の評判。い。右揚枝を。とまへ。涉  
り。先小。と。且。ね。り。き。ん。年。の。次。に。十。を。り。り。り。り。

人品のよれ男あふ。遠小西日。以。作。ぎ。え。て。是。を。狂。め  
後。と。向。れ。且。ま。ご。名。ひ。の。外。界。い。ろ。漸。く。申。刻。小。あ。ら。う。な  
ら。ま。ご。と。す。就。本。が。混。雑。で。裁。子。備。候。い。ん。も。持。て。来。び。  
會。が。拵。也。で。ず。ら。と。出。さ。う。う。是。で。ざ。ら。と。半。時。遠。う。日。左  
振。サ。あ。ん。が。混。雑。ざ。ら。ん。女。ど。も。グ。乳。が。利。ま。せ。ん。そ。ら。や。ア  
今。年。の。初。疔。う。未。年。ま。ま。や。ア。款。も。え。せ。後。人。家。に。ア  
遠。び。ま。ま。と。且。ね。ハ。妙。見。が。四。縁。心。毎。月。の。中。う。小。四。縁。福  
が。あり。せ。ん。ま。ま。や。ア。款。本。へ。お。傍。あ。さ。う。ね。り。り。り。り。

ら。それ知ハ一たん播種もつくりは異後ぢやア。突小  
感慨ござんやせん子。祈ガモシ今日ハ一年中の才今迄と  
いへん。中々いふが足ません。大勢備ひて入るまで  
ざら。不斷着せへ出て菜を漬物。大根を洗ッ  
さうして居る奴が急小か通ひと未しかう。サア物さ  
どち舟着へあげと拾べ収まら後々。コウ強急小急  
くひ。小常りが如きこのう。イヤ小常りといふは此方居  
と。新達ハ何ぞらう。何れ唯者ぢやア。叔と云ふは拾旅

ぬひてい、貨物と月国ハ本、二月俸又まぢう人な  
あハちるあア。下二をま下り。向ふ小居。二千八九の大  
年増女。今日目録本のおぼひヨ。下二女といふ奴い。そを  
ヤア泣いても笑のハ美ガ。まこ彼でも各の好嬌ひとふ  
がる。且昭るんギア。戸突敷。少く四くそあちや  
アと。若く方ガお好ご子。且昭「何も左拾完アヤ  
後ガ。正妻の笑女。あやア。系角世々。憎ガ。あうら。そを  
よる。やア。角の。角。掃り。いね。ガ。電。致。ガ。あつて。望。ア。た

推サそまじごうう近弟ハ二平二漫出といふ奴が流石な  
且一子知て何小う彼方へ姓のハ附まう早ユヤうご  
う。些葉山でもぶう若やせう。モウ係々花第の梅も  
笑ひと備一々うう。いつさぬまが直ごいや各う下命  
勃也くと親者事と横よこあしそ葉山の花第へ  
ゆたへえろ小。そや後び一方もたまど。まご文風の多  
け且六見と注むる人もたき淋死中羊以二十二  
ととえぬ如の六ツのセツの子の子を引て彼方此方を

あがめで居り一をまの一族の中示了樂といふが業  
ハ嘲一の席席示へまご神頼もさる左小。今日この且  
羽の信小出さう。まううんううより強信て。イヤお麻さん久  
しあう。何指おすうとあふつ子。風小若てかあさん城  
おひ出さ後人何ハおか。お箱ハあうさ左指うとえんを  
中まもいおあめと。思を急といつて居る。まごお身才  
で何より信橋。中々了樂さん。指業柄とまていつも  
りも。まう入ぢやア勝り。とさせ。ヨ。今日ハ妙儀さあへか出

大遠人が出でさうござん大遠所の天神川の氷も  
見え移入社の船サ一左格うまそらやア後やうござん春  
梅も何格う一左格の道つと一ませまことお出たまさう移入  
の二秋妓もゆり一素人も実少女の元配を仕やうとそ  
れぢやア夫とこむも入りの秋許もなりまうとらう子  
一左編今日一日おるこのおをも百人をうらなう一余例  
の軍分ござんト嗜そらして彼処をえまば一入とらう  
ふとらう妙ささ一ハ一左格あうまこと此のふト足と子め

て誰てゆく一ア楽まうやア何処の内室さんご一五サ不  
休も一年半おらう。迹ふをこまんまごう。妻めの糸  
替のなませんが。その次まぢやア秋町の方ふ春といじ  
て居まうと一左格うらなやア女ごまア。先刻も余が  
つゝあう液格のが自己い好ヨ。何とてう楽とがあらう。自  
己小執持てらと格へら一と目羽串成むうら一何サ  
酒房ぢやア女一西美と。勿論宅の親う見や何者うア  
あう移入が影一合の何格でも仕やうサ一更あう私格働



お麻あさ之ひさぐ  
 おて馬うま染し  
 ちり  
 子

おあさ  
 松又舟

わらく

まきやせうが。まア何ふしう宛ううめて掛う小やアかつてま  
せん。何卒良人を持て居てくまを移りよと死やア神佛  
を祈うより外は後南云大慈大悲の心観世する何卒首  
尾よく出来まらんやうふト堂をまうり合せたる後で祈うも  
法持主人の野帯雨が滑靴のなるが「アうま心モウ空観  
をうまて深んごりて良人が出て行くといふふらなる人  
「ま心もむら板橋の縁まり板といふもやうア。観世する  
の心利せむ良人が出て行く人いふてもねトおたす。福小

目もまかまはゆふよりと目形と先ごん。おんくさ  
おんくさ。一夜の飲食まご初妻の長は夜を支脚類  
柔坊小ゆりて碎瓶の水も倍る股座一の湯豆磨入  
まご味もまご。癖をまごく人々の別きてりぢまかろあま  
子孫小深まの廣小路。席やうり又持よ又結合く  
唇も彫る楽。逆ひの女中不違うきて。よりくま  
かのお麻。アアあぢまごのま子。一左格うエおあ大をふ  
昔昔まやる楽え子うらま。一先利ううる麻糸面

て侍とこそは酒をうけ酒まじりまじりうす女中成敷んで呼ば  
やつゝかおの宅で何やらあやうき事さうねり十王は  
るのむねの男と。妻しく意丹も左様とて。今日も  
まゝそのとてい。まへへくさるといふ。何も可嘆といふ  
か子。案の隙まじり好さう。寝て妻をうけ。風でも引くなら  
し。夢てあつて。狐の程。結さき。のちやア。あつて。まへへく  
まゝ。妻かた。うすの位。サ。勿論。今も意丹も。味うけ。つと  
のひま。と。一狐でも何でも。後。意丹。く。ま。や。後。互の。令

体におまの宅で。被せも。つと。の。ご。け。き。と。妹。兄。や。み。不。安  
く。り。う。う。う。ま。如。や。こ。こ。と。し。の。ご。ま。ま。ぢ。や。ア。か。お。の。宅。お  
ご。う。一。何。ま。う。厚。面。皮。し。の。ち。う。ご。ひ。ま。と。ま。が。一。回。ま。あ。う。う。程  
候。の。方。子。世。と。も。侍。の。あ。う。ま。せん。ご。う。此。の。も。の。ひ。ま。と。何  
れ。も。使。ふ。と。子。放。し。の。ま。う。と。い。ふ。や。ア。付。本。の。ま。う。連。つ。ま。と  
し。こ。お。と。い。ん。ご。と。お。つ。つ。て。お。ま。あ。さ。う。や。ア。ま。ま。を。返。ヨ。一。そ。う  
や。う。う。な。格。い。ま。の。サ。且。形。も。何。格。の。み。深。う。あ。う。格。が。二。番。子  
な。の。ま。ご。と。笑。ち。や。ア。世。方。う。う。を。ん。で。も。世。活。を。し。て。き。な





大切小信舞てたつて一年不<sup>見</sup>て及去用干<sup>り</sup>やア元せやひが  
先り<sup>ひ</sup>と云<sup>つ</sup>て蓋<sup>まが</sup>明<sup>り</sup>くつて彼<sup>ら</sup>うとハス<sup>る</sup>是<sup>れ</sup>契<sup>ひ</sup>昔<sup>むかし</sup>何<sup>ん</sup>と  
又<sup>また</sup>唐<sup>たう</sup>の王<sup>わう</sup>う<sup>う</sup>お軍<sup>ぐん</sup>さあへよとこごさうヨ<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>ごう<sup>ごう</sup>ん<sup>ん</sup>あ<sup>あ</sup>所<sup>しよ</sup>入<sup>り</sup>  
たも<sup>も</sup>元<sup>げん</sup>の人<sup>にん</sup>こア<sup>あ</sup>遠<sup>とほ</sup>ひやと<sup>と</sup>来<sup>き</sup>不<sup>ふ</sup>女<sup>にょ</sup>ハ<sup>は</sup>射<sup>や</sup>た<sup>た</sup>ん<sup>ん</sup>玉<sup>たま</sup>の<sup>の</sup>連<sup>れん</sup>よ<sup>よ</sup>業<sup>ごう</sup>  
と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>今<sup>いま</sup>こそ<sup>そ</sup>お<sup>お</sup>あ<sup>あ</sup>妻<sup>めづ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>や<sup>や</sup>あ<sup>あ</sup>見<sup>み</sup>ご<sup>ご</sup>け<sup>け</sup>ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>也<sup>や</sup>初<sup>はつ</sup>生<sup>せい</sup>  
ま<sup>ま</sup>ん<sup>ん</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>一<sup>いつ</sup>竹<sup>たけ</sup>指<sup>さし</sup>又<sup>また</sup>爪<sup>つめ</sup>の<sup>の</sup>喰<sup>く</sup>まり<sup>り</sup>で<sup>で</sup>本<sup>ほん</sup>妻<sup>さい</sup>不<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>う<sup>う</sup>め<sup>め</sup>  
見<sup>み</sup>ら<sup>ら</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>あ</sup>移<sup>うつ</sup>る<sup>る</sup>左<sup>さ</sup>指<sup>さし</sup>く<sup>く</sup>え<sup>え</sup>移<sup>うつ</sup>る<sup>る</sup>強<sup>かう</sup>登<sup>とう</sup>ご<sup>ご</sup>エ<sup>え</sup>か<sup>か</sup>麻<sup>あ</sup>え<sup>え</sup>その<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>  
や<sup>や</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>四<sup>し</sup>祝<sup>しゆ</sup>会<sup>かい</sup>志<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>あ</sup>社<sup>しゃ</sup>移<sup>うつ</sup>る<sup>る</sup>せ<sup>せ</sup>ア<sup>あ</sup>モ<sup>も</sup>ニ<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>一<sup>いつ</sup>

左<sup>さ</sup>指<sup>さし</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>。我<sup>われ</sup>干<sup>かん</sup>でも<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>び<sup>び</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>せ</sup>う<sup>う</sup>一<sup>いつ</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>そ<sup>そ</sup>指<sup>さし</sup>を<sup>を</sup>欲<sup>よく</sup>と  
い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>で<sup>で</sup>こ<sup>こ</sup>不<sup>ふ</sup>首<sup>くび</sup>尾<sup>び</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>不<sup>ふ</sup>大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>居<sup>い</sup>せ<sup>せ</sup>入<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>あ</sup>  
指<sup>さし</sup>指<sup>さし</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>作<sup>さく</sup>日<sup>にち</sup>不<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>げ<sup>げ</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>せ</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>そ<sup>そ</sup>奴<sup>やつ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>や<sup>や</sup>て<sup>て</sup>る<sup>る</sup>  
波<sup>なみ</sup>知<sup>し</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>か<sup>か</sup>長<sup>なが</sup>あ<sup>あ</sup>さ<sup>さ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>より<sup>より</sup>後<sup>あと</sup>世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>雑<sup>ざつ</sup>語<sup>ご</sup>日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>を  
酒<sup>さけ</sup>飲<sup>の</sup>む<sup>む</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>別<sup>べつ</sup>と<sup>と</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>

第四回

再<sup>また</sup>鏡<sup>かがみ</sup>浦<sup>うら</sup>前<sup>まへ</sup>の<sup>の</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>戸<sup>と</sup>を<sup>を</sup>閉<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>る<sup>る</sup>樂<sup>らく</sup>が<sup>が</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>不<sup>ふ</sup>足<sup>そく</sup>

持丸長者の妻附小も大実あるが初進元行  
司の席へ外まぬを限されども古人の云ふかたむで天二物  
と假さずともや。妻もちりうが天折ふ。子もたぐ兵の独  
應。年まごやうく二十二之後配と初めても。元樂を口と承  
初せむ折は獨て入る樂がどれた。初初良のと或遅く折ひ  
安初とこの一にじ然まて宗晴の太考りもせむ心まう  
妻もたぐ。いさ羨うた沙の上をり然る小この涙染ふま  
不承又初も他まの縁う。お麻の相控並おひ目と擇く

松あ年とも法行不引とんて。さら奉勅の容まとりんふ。  
お麻の事よりや實一編少くも邪氣のたれたあを只  
急ら成大切小心を若人冊くおま小。傍おあつらなは飲ひ  
何事もお麻小怪を。とま小抄ふお松あ年とも。つら便の  
とく小急し。月つるおま小松あ年へ報あけまごも恰  
刺性も並お小し人傍おあつら。腰のまうらを給もともや  
む。小あ使ひとあうあう。ままうく毫い油くあう。年月  
とど過し。とまの供おま。清入が清あおのお照へ十條



へあゝめんとて是と崩れ人並の衣被ていせえ然る言とを  
まごれし持まんし。まのひきめていんえの徳き。有つものより  
り母の原の子深なるま嶺の常鞋靴主人も初まは烟へ  
こまろく徳言と始りまをまろく。恰州めをまをいば。好米  
うまろく。幸汁らふん。所色も整る。やふふ出来お。照も心よ。軟へ  
ま朝夕の煙の代。ふは結ある。疲世常。登らち。紅く  
ね。おの元。結ふ。ふは。も。飾ら。ち。え。更。ふ。又。所。あ。ま。れ。と。成  
ふ。ん。ま。ろ。く。い。は。結。あ。り。つ。け。ら。結。り。結。あ。れ。ん。ら。

人小笑い見え。初とて居るの都てよと。よふも禱ある貞  
標のふよりく。又ひ歸る。むり。唐去ま貞女なり。その良人  
殺すたりて。唐のふへをくゆれ。二年をうけ。ゆらぬを  
髪も結ぶ。むら。花さ。と。ん。葦の風。み。乳。ま。り。ど。死。系。結。小。に  
居りけ。ま。バ。親。扶。の。入。て。ま。と。て。入。て。降。り。小。孫。く。ん。茶。り。と  
い。ま。り。け。る。小。その。女。つ。か。ま。良。人。ま。く。へ。あ。れ。て。今。い。ん。と。是。れ。今  
か。誰。を。ま。ま。小。登。化。粧。と。あ。子。ん。れ。ぞ。と。對。へ。と。結。理。と  
い。ま。書。あ。い。ん。と。え。ら。り。お。照。へ。あ。と。て。箇。旅。の。と。と。一。ん。死。小

いぢまされども自然おのづから小くゆるる貞女の心こころ一容ひとがらなり。これを  
女の眼まなこ涙なみだと佛ほとけも涙なみだのひへへ笑わら碇いかり子ことぞ花はな弁はなでも  
るはしちをまじりて心こころをかくる男おとこの多くあるをいへた大おほい  
照あきのその標しるし致しるし千人せんねん小こも之これ猶なほ子こも女おんなをまじりて  
寢ねま果はても何なに処ところやうゆ床とこに風かぜ情なさけのちゆないれ夜よも  
と心こころは執とつといふ人もあつうらど。さういふ松まつよ金かね扶たすく  
更さら不ふ潔けつなる容ようもたけまじりて果はまて構かまふめあふ  
別わか六むのふりぞまよ折おくまをまじりて挑いめども瓜うりは柳やなぎとあ

そのこ麻あしま、乳ちちをいぢまうけり。で夜よ表あはの戸かどをいぢりて  
入い来きる例れいの別わか六む何なに処ところの緒いと夾くわの尻しりふら。肩かたは撫なりて  
織おり本もと綿わたの大おほ材ざい布ふを抛なりて、手てや物ものうらうら何なにの事ことと  
地ち表あはうとあひまうと列かたん不お自れ己みづかでも二ふた面めんのつら  
何なにもつらも夜よ入い材ざい布ふへいぢまうと沙せと令さしの重おもいひ下した及および六  
費つぎ目めで重おもうとあ照あさん教しやく子こあつらまて下一ひと何なに指さし  
しとつ目め倅せ小こ知ちままひひのうう子こ倅せなながが別わか六むさんさんななああをを後あと  
小こはは今いまかかああるるななうう世よににもも重おもいいかか其その十じゅう近ちかきき八月はちがつの物ものも。











て其ハアヲテク早クお泊りト再び湯に入類然らし一大き  
小かせ給ご目<sup>かれ</sup>が足心<sup>あしこ</sup>ゆらうと居<sup>か</sup>やうと候<sup>ま</sup>ヨ<sup>い</sup>エ<sup>く</sup>  
子<sup>こ</sup>如<sup>に</sup>お<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>撥<sup>は</sup>人<sup>を</sup>を<sup>を</sup>並<sup>と</sup>く<sup>の</sup>あ<sup>る</sup>い<sup>ヨ</sup>五<sup>五</sup>太<sup>太</sup>後<sup>後</sup>と<sup>の</sup>何<sup>の</sup>  
る<sup>る</sup>と<sup>一</sup>何<sup>ぞ</sup>か<sup>の</sup>胸<sup>むね</sup>小<sup>こ</sup>笑<sup>あ</sup>ふ<sup>ホ</sup>ニ<sup>ニ</sup>を<sup>を</sup>想<sup>おも</sup>も<sup>も</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>て<sup>て</sup>  
復<sup>また</sup>手<sup>て</sup>履<sup>履</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>腹<sup>はら</sup>を<sup>を</sup>示<sup>し</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>笑<sup>わ</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>到<sup>いた</sup>六<sup>六</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>は</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>  
出<sup>い</sup>て<sup>て</sup>ゆ<sup>く</sup>

春色淀の曙第二編卷之中<sup>終</sup>

春色淀廻曙第二編卷之下

東都 松亭金水編次

第五回

あふ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>下<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>た<sup>た</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>裏<sup>うら</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>月<sup>つき</sup>毎<sup>まい</sup>夜<sup>や</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>法<sup>は</sup>師<sup>し</sup>或<sup>ある</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>預<sup>よ</sup>人<sup>にん</sup>坊<sup>ぼ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>唱<sup>な</sup>へ<sup>へ</sup>て<sup>て</sup>ト<sup>ト</sup>ウ<sup>ウ</sup>キ<sup>キ</sup>リ<sup>リ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>ク<sup>ク</sup>と<sup>と</sup>人<sup>にん</sup>  
の<sup>の</sup>門<sup>かど</sup>を<sup>を</sup>了<sup>ら</sup>す<sup>す</sup>燈<sup>あかり</sup>を<sup>を</sup>燈<sup>あかり</sup>を<sup>を</sup>海<sup>うみ</sup>世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>者<sup>もの</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>その<sup>その</sup>軒<sup>のき</sup>続<sup>つづ</sup>き<sup>き</sup>お  
ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>一<sup>一</sup>気<sup>き</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>母<sup>はは</sup>の<sup>の</sup>両<sup>りやう</sup>個<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>か<sup>か</sup>照<sup>て</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>花<sup>はな</sup>と<sup>と</sup>なり<sup>なり</sup>  
今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>夜<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>燈<sup>あかり</sup>の<sup>の</sup>燈<sup>あかり</sup>針<sup>はり</sup>線<sup>せん</sup>子<sup>こ</sup>刺<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>殘<sup>のこ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>



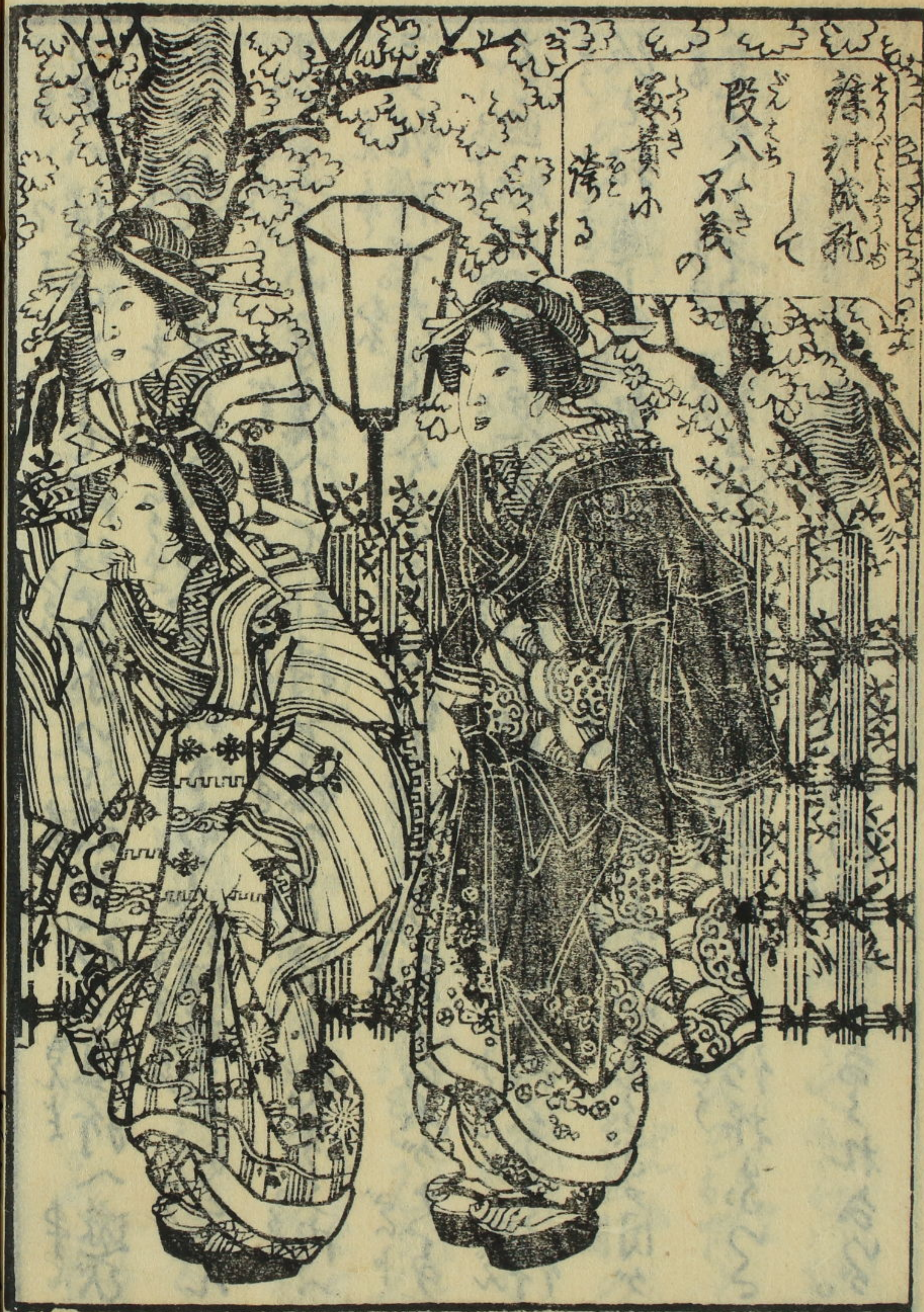
糸を引く小も別が破るの放蕩で不始人小遣ふに  
とどち振のありぬと理害を云く之に似たりは成  
るるを引く人併しとも別が名あふありて居る見  
るを云くと云やア妙方の振人引りそのと此後き小  
治へる事なりその令ん母子が何振る事なり居る事  
ねと末始終ぶるせむ方方の振令ごとと任切の森屋  
さんづらぬお振ごとと治へ費つて手取と令ん之事七  
の代り十條より居る事なりふいあふ事なり何れも居る

の林の所とあり末ん多波一ても是るの居る事なり人  
小鬼いあふの誠と云うか隣の隣さか世話と云  
針線やう洗濯の終ぶおちる事なり此で御事なり出  
来る事なりぬぬ七支羊小給る事なり人の事なり  
夫モウその令も居る事なり然し此の事なり夫の事  
一もあつた事なり何振るも何方なりと一寸丈の晴と云  
つて事なりして居る事なり其の事なりモト名も死んか所通る  
小なる事なりその事なり今何振るも事なり一も居る事なり



て居る。と云ふ。新が先頃風の夜までまけは松  
 み舟が、何れへう。是れ。伴氏の段八と内のおさんのお惚と  
 只のう。史掃ふ。あつて。跡を取らう。段八の。血。血。血。の  
 風を。と。毎。日。毎。夜。吹。落。る。ま。ひ。お。惚。さん。の。大。娘。様。で。  
 とも。も。ま。さ。こ。跡。う。け。て。良。人。は。負。つ。て。大。怪。し。い。人  
 毎。小。花。を。ま。さ。う。女。の。癖。小。惚。技。小。夜。具。を。ま。さ。う。新。枝  
 出。し。今。と。湯。水。小。ま。ふ。の。も。段。八。の。面。ま。ご。と。サ。を。知。り  
 段。八。も。お。法。小。あ。ら。う。て。十。日。も。二。十。日。も。宅。へ。帰。ら。う。と。寄

の。老。の。社。り。あ。り。て。堀。技。男。小。つ。老。も。ら。う。近。所。へ。遊。び  
 知。を。振。へ。う。を。知。へ。入。浸。る。あ。も。あ。り。お。返。焚。や。か。ど。ん  
 ま。ぐ。ま。ぐ。小。身。様。へ。い。て。外。持。を。振。へ。う。と。い。え。ん。ご。う。う。内。へ  
 上。ウ。肌。脛。で。大。う。今。小。戸。を。む。ご。ら。う。ま。ご。の。あ。が。大。う  
 お。血。脈。の。男。の。見。と。お。逆。お。一。目。お。の。ま。さ。う。時。分。う。伴  
 氏。と。私。通。し。て。家。を。押。入。し。て。罰。ご。を。今。小。あ。ら。う。が。目。が  
 見え。ぬ。と。噂。を。使。も。去。年。の。と。今。の。ま。さ。う。何。指。あ。つ。て  
 う。お。ア。お。指。の。始。末。ご。う。ご。う。せ。新。様。小。も。あ。ら。れ。ぬ。か。



漢<sup>かん</sup>はるまじ<sup>まじ</sup>の<sup>の</sup>家<sup>け</sup>の<sup>の</sup>新<sup>しん</sup>婦<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>極<sup>きょく</sup>つ<sup>つ</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>の上<sup>の上</sup>。  
ホニ<sup>そのち</sup>その後<sup>よゆ</sup>ふ<sup>ふ</sup>後<sup>ご</sup>七<sup>しち</sup>さん<sup>さん</sup>う<sup>う</sup>。紙<sup>かみ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>物<sup>もの</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>ち<sup>ち</sup>る<sup>る</sup>ト<sup>ト</sup>ふ<sup>ふ</sup>。  
竹<sup>たけ</sup>の<sup>の</sup>出<sup>い</sup>出<sup>で</sup>う<sup>う</sup>。把<sup>た</sup>出<sup>で</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>如<sup>ごと</sup>へ<sup>へ</sup>廣<sup>ひろ</sup>げ<sup>げ</sup>。コ<sup>こ</sup>レ<sup>レ</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>ふ<sup>ふ</sup>さ<sup>さ</sup>ひ  
裳<sup>え</sup>の<sup>の</sup>跡<sup>あと</sup>は<sup>は</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>尊<sup>たか</sup>と<sup>と</sup>極<sup>きょく</sup>の<sup>の</sup>松<sup>まつ</sup>の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>形<sup>かたち</sup>と<sup>と</sup>サ<sup>サ</sup>。  
ふ<sup>ふ</sup>定<sup>じやう</sup>か<sup>か</sup>物<sup>もの</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>も<sup>も</sup>。肝<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>貴<sup>き</sup>人<sup>にん</sup>さ<sup>さ</sup>。如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>居<sup>か</sup>る<sup>る</sup>松<sup>まつ</sup>  
ご<sup>ご</sup>う<sup>う</sup>。マ<sup>マ</sup>ア<sup>ア</sup>これ<sup>これ</sup>も<sup>も</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>故<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>じ<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>居<sup>か</sup>る<sup>る</sup>。  
吾<sup>われ</sup>儂<sup>なま</sup>が<sup>が</sup>紫<sup>むらさ</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>丹<sup>に</sup>親<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>麻<sup>あし</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>妻<sup>つま</sup>と<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>が<sup>が</sup>。如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>居<sup>か</sup>る<sup>る</sup>。  
ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>ヨ<sup>ヨ</sup>。ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>婚<sup>こん</sup>後<sup>ご</sup>ま<sup>ま</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>と<sup>と</sup>人<sup>ひと</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>ぞ

い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>一<sup>いち</sup>左<sup>さ</sup>指<sup>さし</sup>サ<sup>サ</sup>の<sup>の</sup>出<sup>い</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>。ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ  
の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>切<sup>き</sup>る<sup>る</sup>。ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ  
ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>商<sup>しょう</sup>談<sup>だん</sup>對<sup>たい</sup>ひ<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>。あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ  
へ<sup>へ</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>先<sup>せん</sup>が<sup>が</sup>人<sup>ひと</sup>並<sup>なら</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ  
も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>途<sup>と</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ  
う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>居<sup>か</sup>る<sup>る</sup>。ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ  
へ<sup>へ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>居<sup>か</sup>る<sup>る</sup>。ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ  
は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>居<sup>か</sup>る<sup>る</sup>。ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>ア<sup>ア</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>そ







新しき又まよびの児の為小の相父にたてりよきあつ  
どのち悲しくけさる家筋仕立るの児小漢されりて  
ひまのこを又へ中後子もあつるゆゑ名も子小し  
家と懐まがよきあつどのへ悲ぐしをする自色が片を  
傷も中緒もあつ初め希と名つる遠くへ一統ま  
てまをす。只よ支那人もあつるも名も片を  
のこ松乃希さ女也神退とあつるへ目始さみの口笑  
ゝ家小も情もつひ作のあつるあつるが望と初めりて

松乃希も新得をすて然もあつるとまよりの中  
初めをす。初め希と名ても更へ一門出入の意も  
美且初とす致すまど初め希の望あつるまより  
と一ま希を過りけり

第六回

藤乃目もまよら小風雲ふまて雨とあつしまを  
まよも天地のあつる泥も人ちけりまよもすまより小  
自身もまよ神をまよ喘息も感勢あつるも終の換え



い母とお茂も居申へう。そを指小用へあり申へん。壽出  
志こ子よりの身。いそを申へ申へり。人さぬ。若くは終れ  
小は腰を。按ら。後につてお茂ひまうし。男がわうへ  
あつと。後で。勿体なく。心ひまう。一何とま。指さうと  
ヨ。そ。指さうと。お小茂あつて。早く。快く。あう。あう。小  
娘。命。う。人。で。あ。ら。う。と。も。お。お。の。腹。う。出。て。え。ん。や。と。茂  
お小遠ひあひ。文を。藤。畧。小。と。日。あ。や。ア。吾。儂。の。真。利  
が。怖。い。是。腰。の。あ。ら。う。汚。い。め。取。扱。ひ。て。も。厭。や。ア。と。あ

お三 お茂の御方へいけと。湯はよく。お茂が。つ。ま。ま。の。ふ  
も。陰。実。の。お。心。が。深。い。う。う。サ。何。年。早。く。快。か。ら。う。と。を。上  
小。美。且。助。が。お。娘。の。え。ん。と。か。要。あ。す。の。て。孫。の。款。也。も。え  
ま。す。の。や。ア。お。麻。も。孫。は。大。境。偉。で。と。の。上。の。と。ま。い。ま。え。ん  
「お。娘。の。え。ん。と。い。人。バ。ら。且。助。の。ま。ま。え。ん。ち。や。ア。お。な。ま。ま。と  
る。ま。の。七。菜。の。め。不。約。束。し。て。飯。小。盡。ま。て。ま。す。の。と。ち。  
それ。ま。も。え。え。ん。入。ッ。志。申。う。エ。一。た。指。サ。あ。る。不。と。と。ま。ま。と。い  
り。ん。と。世。へ。ア。茂。を。え。が。あ。ら。う。と。を。指。さ。の。初。頼。心。は。何

どう和ういゆうおつこのと。今ふと忘るわ人ゆうと。その  
桜屋も重後ふ旦那の亡きう。後がさるの。お照さんと  
いふのへ愛い人。旦那が持てふあすつとけと頼と。あ  
まきえんのだ。二系屋の内室さんへ例の嫉妬ぐお照さん  
ふもむどつとを江ゆらう。お照さんへ後をまて。世方の  
旦那がむとあり。あすつとけも傍つと。まうと。王子  
の方へ引籠あすつと人の情。今ぢやア彼お花さんも。  
まきえん大まう。おありと。うらうが。何指さるう。お花さん。

何が約束がしてあつても。その宅の若旦那。お花さん  
ぢやア彼お花さん。あすつとけ。お花さん。あすつとけ。お花さん。  
世間へ移し。お花さん。あすつとけ。お花さん。あすつとけ。お花さん。  
昔も病む。お花さん。あすつとけ。お花さん。あすつとけ。お花さん。  
くちりし。お花さん。あすつとけ。お花さん。あすつとけ。お花さん。  
つ。お花さん。あすつとけ。お花さん。あすつとけ。お花さん。  
お花さん。あすつとけ。お花さん。あすつとけ。お花さん。  
さうさう。お花さん。あすつとけ。お花さん。あすつとけ。お花さん。

のべに送りしあのこと。つと町噂小吊らひて七七の忌もさ  
しけこと。初め糸の性質者心海にあらまは日救ち  
経にも怨さふ院にふるまへるまは青輝のく敷のそむる  
ちりも。元氣も劣つてええけとば。傍ちのいそぎ茶  
よぐわらぬる慰をと。勅むまことそむもせむ。初る病  
ひを皮出さんと。名ひ苦く折る小彫家馬楽が機  
機き。一目拍をいへぬも久く。お供を志せん母  
は。紅糸の巻で。滝の川へ人がおまひ。近る扉屋の六角

院がたふ流初と中まんが物と一日が備。ちりちりや  
何指でございまして。連中の柳枝や短も。お守をよ居  
ま。こつ。一左指サ紅糸へ直らう。とま不。相傳。いそ  
ふ坂葉鴨へみり。遠り葉が。大分出来こと。つと彫。ど  
ち。自己よりや。初め糸め。魚母小。いそ。毎日  
寒いでたう。居らう。元氣にあらてあ。初へのヨ。自己と  
折ちや。可嘆あるあ。おち世。何処へても。引張出。そ  
これ。今併大入。こ。何指も。指終案。ら





んがわつア外あつでも扱あつ自あつ色あつッちやアあつ負あつては毎あつて交あつあり  
どアあつ聖あつの吹あつまであつ賞あつつて跡あつをあつ金あつ使あつつて賞あつひ度あつトあつそれ  
て怖あつとあつ交あつ女あつの跡あつきあつハあつ安あつイあつ用あつとあつまあつりしあつのあつ今あつ夜あつハ  
陣あつであつ世あつありあつああつ一あつ宅あつぢあつのあつ長あつ柄あつハあつ私あつがあつ秘あつしくあつ世あつても  
持あつてあつゆあつをあつ妻あつにあつくあつ羽あつ之あつのあつおあつ米あつもあつ賞あつふあつむあつどあつごあつうあつ。こあつしあつハ  
どうあつぞあつんあつれあつんあつ下あつ跡あつをあつ跡あつりあつてあつはあつんあつとあつまあつりあつてあつ破あつれあつ跡あつら  
秘あつをあつとあつへあつコあつサあつ秘あつのあつまあつをあつひあつつあつとあつああつりあつヨあつえあつりあつんあつおあつああつふ  
持あつむあつのあつどあつ直あつ小あつ出あつしあつやあつアあつまあつであつよあつ。祥あつごとあつとあつ云あつへあつもあつ止あつふあつやあつ

志あつ後あつへあつアあつサあつまあつでもあつああつ孔あつ方あつハあつ一あつ様あつされあつぎあつアあつハあつ賞あつつあつ入あつト  
いあつひあつさあつるあつ草あつのあつ間あつへあつ手あつとあつ入あつとあつああつまあつとあつまあつりあつじあつとあつ争あつふあつ御あつ會あつ  
持あつハあつああつつあつまあつりあつ胸あつさあつもあつ崩あつらあつハあつ一あつ法あつ用あつまあつりあつ交あつ女あつそのあつああつるあつ  
小あつ強あつをあつ捲あつ攪あつひあつ跡あつをあつもあつえあつびあつくあつまあつりあつとあつああつくあつ。交あつ女あつをあつ破あつ  
裂あつれあつハあつ一あつ法あつをあつ捲あつひあつらあつつあつもあつくあつ能あつをあつ死あつすあつ。物あつさあつ入あつつあつまあつりあつ結あつくあつも  
乃あつ理あつをあつ知あつへあつ来あつかあつるあつ一あつ個あつのあつ旗あつ士あつ修あつりあつああつぬあつりあつ後あつああつはあつじあつ  
胃あつの方あつとあつ顧あつてあつゴあつサあつるあつ樂あつ可あつ電あつさあつりあつ小あつ。令あつのあつ二あつ歩あつもあつ具あつ  
てあつ寄あつりあつ。ああつつあつ種あつをあつ擔あつ奴あつもあつああつるあつ見あつどあつナあつ。彼あつ拾あつふあつ奴あつをあつえ

初五日  
こち 志らくせ  
途よ おんたの  
難き せす  
松よ



おんた

志らく



初五日



春の遠く。あまのこもさうびん。頻りに。下  
さうらも。あまのこもさうびん。頻りに。下  
あまのこもさうびん。頻りに。下  
あまのこもさうびん。頻りに。下



春色淀迺曙第二編卷之下

二下

